

『詩経』の無韻部分に対する 明・郝敬『毛詩原解』の音注について

富平美波

1. 『毛詩原解』の音注

『毛詩原解』は、明末の学者郝敬が著した経書に対する注釈、所謂「郝氏九経解」のうちの1種である⁽¹⁾。

郝敬は、明の嘉靖37年（西暦1558年）生まれ、崇禎12年（西暦1639年）に享年82歳で卒。字は仲興、また楚望と号し、楚の京山（明の湖広、承天府所属。現在の湖北省京山県。）の人であることから、郝京山と称される。父の承健は肅寧（京師、河間府所属。現在の河北省、肅寧県。）の知県を勤めた人であったという。若い頃、同郷の父の友人李維禎の教えを受け、万暦17年（西暦1589年）に進士となり、礼科及び戸科の給事中を勤めたが、万暦時代の礦税とそれに伴う弊害を糾弾して退けられ、官を辞して読書と著述にふけったと伝えられる。地方官としては縉雲（浙江、処州府所属。現在の浙江省、縉雲県。）・永嘉（浙江、温州府所属。現在の浙江省、温州市。）・江陰（南京、常州府所属。現在の江蘇省、江陰県。）等の知県に任じられたことがあった。⁽²⁾

現時点までに筆者が参照することを得た『毛詩原解』のテキストは下記の4種類であるが、

- ①『四庫全書存目叢書』所収本（底本は湖北省図書館所蔵の明万暦刻『郝氏九経解』本）（大阪大学蔵）：以下（存）と略記する。
- ②名古屋大学図書館所蔵本（刊本）：以下（名）と略記する。
- ③東京大学東洋文化研究所所蔵『郝氏九経解』本（鈔本）：以下（東）と略記する。
- ④「湖北叢書」（清・趙尚輔輯）本

この4種類のテキストのうち、清朝時代に刊行された④には、『詩経』の経文の文字に対する音注が現れないが、明刊本の影印ないし、明刊本に基づくと思われる①（存）・②（名）・③（東）には、『詩経』の本文部分に音注が見え、その中には「叶音～」・「叶～」の形式の音注、すなわち叶音注が多数含まれていることがわかった。この音注を付したのは誰か、最も考えやすい推定は著者郝敬自身の手になるもの、ということであるが、確証が存するわけではない。望むらくは、郝敬自身の作でなくとも、せめて、郝敬の膝下や学窓にあってその教えを受けた子息や門人が生前の郝敬の教示に基づいて付したものであって、従って、郝敬自身の音韻観を研究する資料とする価値のあるものであってほしいところであるが、（存）（名）（東）の巻首に「京山郝敬著 男千秋千石校刻」と刻されていること、（東）を含む東洋文化研究所所蔵の『郝氏九経解』末尾

〔孟子詳解〕の巻末)に「時萬曆己未孟夏京山郝氏家刻」(萬曆己未は萬曆47年、西曆1619年)と記されていることから、明代における『毛詩原解』或いは『九經解』の刊行が、家刻の形で、著者自身の子息の手によって行われたことが推定でき、上記の推測どおりである可能性はかなり高いと思われる。他にも、郝敬の著述の集大成として『九經解』と並んで重要な叢書『山草堂集』を見ると(東京・尊経閣文庫所蔵 明版)、収録されている著述の巻首に「男洪範校 門人彭翮校」(「談經」・「易領」など)・「男洪範録」(「学易枝言」など)・「新安章文焯編 男郝洪範校」(「時習新知」)等の記載があって、明末における郝敬の著作の集成・刊行にあたっては、編集・校訂に子息や門人が係わっていることがわかるし、同叢書所収の著作の中でもとりわけ音韻・文字・訓詁などの小学と関連深い「読書通」の巻首には「京山郝敬撰、男洪範校 門人彭大翮陳珙同校」とあって、小学の領域でもやはり子息や門人によって郝敬の学問が受け継がれ公開された様子が伺える。

筆者は、昨年度(平成17年度)より、この明刊本『毛詩原解』に見られる音注の収集・整理・分析の作業を行っており、現時点までに下記のような第1段階の作業をほぼ終えたところである⁽³⁾。

1. 上記(存)・(名)・(東)の3種類のテキストについて、音注を抽出・比較した。(その結果、テキスト間で若干の異同があることがわかった。)
2. 王力著『詩經韻讀』(1980上海古籍出版社)に従い、韻部ごとに『詩經』の各詩編の押韻を抽出して、押韻字に『広韻』及び『《詩經》古今音手冊』(向熹著 1988南開大学出版社)に掲載されている中古音を注記した韻部別『詩經』押韻一覧を作成し、その対応する箇所、『毛詩原解』の音注を記入した対照表を作成した。(電子ファイル化の作業を遂行中。)

2. 本稿の目的

筆者は、あしかけ2カ年にわたって上記の作業を遂行中、『詩經』の中で、王力『詩經韻讀』が無韻としている詩編・詩章や詩句に対して、『毛詩原解』がしばしば押韻に関連すると思われる叶音注を付していることに気付いた。無韻とは、いうまでもなく、その詩編・詩章に押韻がない、或いは、その詩句に押韻字がない(その詩句が押韻に参加していない)と認められるということである。当代の『詩經』の音韻研究の到達水準を示す業績として王力の学説は必ずしも唯一のものではないが⁽⁴⁾、『詩經』の各詩編のいずれの文字が押韻字であるかを確定する上では、まず穏当な結論を提出していると思われる。むしろ、その点においては、『詩經韻讀』は、穏当な中でも、より多くの字を入韻字と認め、従って、やや多くの合韻例の存在を許容している傾向があると思われる。その『詩經韻讀』において無韻と認められている詩章をも、『毛詩原解』がしいて押韻しているとしてそれを読もうとしているとすれば、これは『毛詩原解』が『詩經』の読み方について示した(現在から見れば)独自の姿勢を示すもの、とってよからうと思う。

本稿は、それら無韻の部分に付された『毛詩原解』の音注を集成して、そこに見られるいくつかの特徴を述べようとするものである。

本稿が関連する研究は、『毛詩原解』全体を対象としてその音注を整理・分析し、その結果を公表することを目的として開始されたものであって、本稿は、その中間段階における1つのノートに過ぎないが、上に述べたように、やや特殊な範囲を対象とするものであるので、敢えて独立させ、やや尚早ながら、その範囲における特色をまとめてみることにした次第である。

3. 2字連続した押韻

『毛詩原解』の版本には、冒頭に「読詩」と題された『詩経』に関する総論が掲載されている。この「読詩」の文章は、前記した叢書『山草堂集』が収録する『談経』⁽⁵⁾ 卷三「毛詩」とほぼ同一の内容を持っている。この「談経」卷三「毛詩」ならびに『毛詩原解』掲載の「読詩」の最後の部分⁽⁶⁾が、『詩経』の音韻に関する総論にあたっており⁽⁷⁾、その中に、『詩経』の押韻技法の特徴を幾つか挙げて説明しているくだりがある。その中で、郝敬は「両字連叶」という押韻の存在に言及している。下記がそれに関する部分の全文である。

「有兩字連叶、如遵彼汝墳、伐其條枚、未見君子、怒如調饑、魚網之設、鴻則離（音注：歴）之、燕婉之求、得此戚施、皎皎白駒、賁然來（音注：力）思、條枚、調饑、離之、戚施、白駒、來思、皆二字連叶也。」

指摘されている詩章は、順に、10汝墳の第1章⁽⁸⁾・43新臺の第3章・186白駒の第3章である。すなわち、

①「遵彼汝墳、伐其條枚、未見君子、怒如調饑」：10汝墳の第1章

「両字連叶」とは、ここでは「條2-3（蕭平定 幽部）」⁽⁹⁾と「調4-3（1蕭平定・②尤平知・蕭去嘯定 幽部）」が押韻し、かつ、「枚2-4（灰平合明 微部）」と「飢4-4（脂平開見三 脂部）」が押韻しているという見解を採るものではあるまいか。王の『詩経韻読』は「枚2-4」と「飢4-4」の句末字の押韻だけを認めている（微脂合韻）。

②「魚網之設、鴻則離（音注：歴）之、燕婉之求、得此戚施」：43新臺の第3章

①と同じように、ここでは「離2-3（○支平開来・支去寘開来・齊去霽開来 歌部）：音歴（青入錫開来）」と「戚4-3（青入錫開清 覺部）」、「之2-4（之平章 之部）」と「施4-4（①支平開書・2〔集〕支去寘開以 歌部）」がそれぞれ押韻しているとみなされているものか。王の『詩経韻読』では「離2-3」と「施4-4」のみが歌部の押韻として韻字と認められている。

③「皎皎白駒、賁然來（音注：力）思」：186白駒の第3章

ここでは「白1-3（庚入陌並二 鐸部）」と「來2-3（①哈平来・2〔集〕哈去代来 之部）：音力（蒸入職開来）」、「駒1-4（虞平見 侯部）」と「思2-4（○之平心・之去志心 之部）」の2つの押韻があるとみなされているものか。王の『詩経韻読』では「思2-4」・「期4-4」・「思6-4」が之部

の押韻をなしていると思われている。

上記のように、郝敬は、これらの詩句を「両字連叶」一すなわち、2句の句末の文字と句末から2字目の文字がそれぞれに押韻をなし、それらの2句の間に重畳した韻の調和があると認めている。このことは、本稿が対象とするところの、王『詩経韻読』が無韻と認める部分を押韻に参加させている例に該当する。なぜなら、これらの字の中で王『詩経韻読』が押韻と認めているものには、唯一10-1の「枚2-4」と「飢4-4」のペアがあるのみである（微脂合韻）からである。

これらの押韻例は、そのほとんどが「談経」・「読詩」の中で触れられるのみで、『毛詩原解』の経文に対しては、これに該当する音注が欠けている場合が多い。但し、1例だけについては『毛詩原解』の中に、同じ文字のペアが押韻していることを示す音注が付されている。すなわち、186「白駒」第3章の「来2-3」に「與白叶列」という音注が付されているのがそれであって、ここからかろうじて、『毛詩原解』においても同様の発想があったらしいことがうかがわれるにすぎない。しかも、この186-3「来2-3」に対して指定された読音は『毛詩原解』の音注では「列（仙入薛開来）」であるのに対し、「談経」・「読詩」では「力（蒸入職開来）」であり、音注字が互いに相違している。郝敬において、どちらがより先立つ見解であるのかわからないが、同じく『毛詩原解』に収録されているとはいっても、「読詩」と『原解』本文の音注との間には、何らかの認識の変遷が認められるようである。

上にも述べたように、郝敬の指定する押韻字の中で、王『詩経韻読』によっても押韻であると認められているものには、唯一10-1の「枚2-4」と「飢4-4」のペアがあるのみである（微脂合韻）。他のペアは、現今の解釈によれば、10-1の「條」・「調」（ともに幽部）を除いては、同一の韻部に属さない文字同士である場合がほとんどであって、例えば43-3では、王の『詩経韻読』が「離2-3」と「施4-4」で歌部の押韻があると認めるものを、句中の位置が異なっているせいか、わざわざ2つの押韻に分割して、「離2-3」（歌部）と「戚4-3」（覚部）、「之2-4」（之部）と「施4-4」（歌部）という別韻部の文字同士のペアを作ってしまったが、これらの文字は、我々の脳裏にある上古音の韻部を離れて後世の音に下って考えると、何らかの類似性を持ち、郝敬によって叶音可能と考えられたものなのであろうと推測される。例えば、「之」（之平章）と「施」（支平開書）とは押韻可能な字音を持っており、「離」（支平開来）は「歴」（入錫開来）の音に「叶う」ことが可能であって、そうすれば「戚」（入錫開清）と押韻可能になる、というようにである。

4. 「周頌」に関して

266「清廟」から296「般」に至る「周頌」の詩編は、全編にわたって押韻のない詩編を多く含む（王の『詩経韻読』では9編に及ぶ）。また押韻のある詩章においても、その中に長いものでは4句にわたって押韻がない、章末の句が押韻に参加していないなどの現象が見られる。就中、276「臣工」などでは、全15句から成る詩編のうち、押韻があるのは最初の2句（「工1-4」と「公2-4」

で東部の押韻) だけで、続く13句においては押韻が見られないほどである。『詩経』の全体にわたって、後世の目から見れば時に放縦なまでの「叶」音注を付している朱熹の『詩集伝』⁽¹⁰⁾でも、「周頌」に関するかぎり、その冒頭の266「清廟」に対する注で、「周頌多不叶韻、未詳其説」と述べ、とりわけ全編或いはその大部分にわたって押韻の見られない詩編に対しては軽々に叶音注を付さない態度を示している。ところが、『毛詩原解』はそれら「周頌」の無韻部分に対しても(その全ての詩編に対してではないが) かなうかぎりの押韻を認めようとするかのごとき、叶音注を付しているのである。

①全編或いはほとんどが無韻の詩編

王『詩経韻読』では、266「清廟」・271「昊天有成命」・272「我将」・273「時邁」・277「噫嘻」・285「武」・293「酌」・294「桓」・296「般」の9編が全編無韻の詩編にあたる(いずれも1章から成る詩編なので章分けはない)が、『毛詩原解』を見ると、そのうち271「昊天有成命」・273「時邁」・277「噫嘻」・285「武」・293「酌」・294「桓」・296「般」の7編について、押韻箇所を認めていることが推定できるような音注が付されているようすが見られるのである。例えば最初の271「昊天有成命」では、

命1-5 (庚去映明三 真部) : 叶芒 (陽平微・唐平明)

(康2-9) (唐平開溪 陽部)

／

(密3-6 真入質明三 質部)

熙4-3 (之平曉 之部) : 叶吸 (侵入緝曉母三)

／

心5-3 (侵平心 侵部) : 叶相 (陽平開心・陽去漾開心)

靖6-3 (清上靜開從 耕部) : 叶將 (陽平開精・陽去漾開精)

のような3つの押韻が認められているのではないかということが、「命1-5」・「熙4-3」・「心5-3」・「靖6-3」に付された音注から推定できるのである(音注がついてはいないが、それが押韻相手字ではないかと考えられるものは、かっこに入れて示した。また、換韻が行われていると推定される部分は／で示した)。この①に該当する詩編について、『毛詩原解』の音注を見ると、全編が一連の押韻をなすと認められているらしいもの(例えば277「噫嘻」や293「酌」)もあるが、多くはこの271のように何度かの換韻を想定する場合が多い。例えば、273「時邁」は少なくとも4つ、285「武」は2つ或いは3つ、294「桓」では3つ、296「般」は3つの押韻から成ると認められるような音注が付されている⁽¹¹⁾。

276「臣工」は、4の冒頭でも述べたように、全編無韻という詩編ではないが、押韻が認められるのは最初の2句だけで、殆どが無韻の詩である。この詩に対しては、『毛詩原解』は下記のような少なくとも4回ないし5回の換韻を想定する立場を取る。

公2-4 (東平見一 東部) : 叶孤 (模平見)

茹4-4 (○魚平日・魚上語日・魚去御日 魚部) : 孺 (虞去遇日) 叶如 (魚平日・魚去御日)

／

介5-4 (皆去怪開見 月部) : 叶計 (齊去霽開見)

求7-4 (尤平群 幽部) : 叶忌 (之去志群)

奮8-4 (○魚平以・麻平開昌 魚部) : 叶御 (魚去御疑)

／

牟9-4 (尤平明 幽部) : 叶芒 (陽平微・唐平明)

(明10-4) (庚平明三 陽部)

／

年12-4 (先平開泥 真部) : 叶林 (侵平來)

／

(帝11-4) (齊去霽開端 錫部)

人13-4 (真平開日 真部) : 叶義 (支去寘開疑三)

罇14-4 (唐入鐸幫 鐸部) : 博 (唐入鐸幫) 叶孛 (灰去隊並・魂入沒並)

艾15-4 (去廢開疑 月部) : 刈 (去廢開疑)

章中疑問を抱かされるのは、「年12-4：叶林」の音注である。この読音によるならば、「年12-4」は、続く「人13-4」字と押韻していると見なされているのかもしれないし、ひょっとすると前段の「明10-4」と押韻していると見なされているのかもしれない。しかし、「明10-4」のほうは、その前の「牟9-4：叶芒」という音注から推察するに、音注は付されていないものの、「牟9-4」と同じく宕撰の叶音で読まれて、「牟9-4」の押韻相手字と見なされているのではないかと考えられ、他方、「人13-4」は付された「叶義」という音注によるならば、その前後の「帝11-4」（この字は或いは入韻していないのかもしれない）や「艾15-4：刈」、そして恐らく「罇14-4：叶孛」とも押韻と見なされているのであろう。すると、「人13-4」は（或いは「明10-4」は）上下の押韻に合わせて2通りに発音されるのであろうか。そうだとすると、2つの押韻が「年12-4」を換韻の境目として鎖の2つの輪のようにからみあい、「明10-4」や「人13-4」はカメレオンのように字音を変化させて、前から後へと詩章を繋いでゆく機能を果たしているというのであろうか。著者の考えは容易に知れない。

289 「小毖」は王『詩経韻読』では、「臣工」と逆に詩編の最後の部分の、「鳥6-4（蕭上篠端）」⁽¹²⁾・「蓼8-5（①蕭上篠来・2東入屋来三）」にだけ押韻が認められている（幽部）。『毛詩原解』も「蓼8-5」を「了」（蕭上篠来）という音に読んでいるから、この押韻は認めているのであろう。しかし、それに先立つ無韻部分をこの押韻に囲まれた奇数句目の句末字も含めて、『原解』は次のように叶音注を付す。

懲1-3（蒸平開澄 蒸部）：叶綻（山去禰開澄）

（患2-4 刪去諫合匣 元部）

蜂3-4（○鍾平敷・東平並一 東部）：叶范（凡上范奉）

螿4-4（清入昔開書 鐸部）：釋（清入昔開書）叶善（仙上彌開禪）

蟲5-5（○東平澄・東去送澄 冬部）：叶懺（銜去鑑初）

難7-5（1寒平泥・②寒去翰泥 元部・3「釈文」歌平泥 歌部）：叶去聲

通摂・曾摂・山摂の平声と入声昔韻をすべて咸摂と山摂開口の去声の音に合わせてしまい、一連の押韻とするのである。

②押韻のある詩編

押韻の認められる詩編において、一部押韻に参加していない文字をも押韻と認めるものが数例見られる。

275 「思文」は前半4句が押韻、後半4句が無韻であって、後半4句だけを見れば上記の①に該当するともいえるが、『毛詩原解』はこの後半部分を2句ずつに分け、2つの押韻があるとする。

牟5-4（尤平明 幽部）：叶謀（尤平明）

育6-4（東入屋以 覺部）：叶由（尤平以）

／

界7-5（皆去怪開見 月部）：叶稼（麻去禡開見二）

（夏8-5 1麻去禡開匣二・②麻上馬開匣二 魚部）

「牟5-4」と「育6-4」は幽部と覺部で陰入対転の関係にある韻部に属するからあながちまとはずれではないかもしれない。

その他、詩章のほんの一部にあたるものでは、270「天作」や291「良耜」がある。「天作」の例は押韻字に囲まれた奇数句である。

（作3-2 ①唐入鐸開精・2「集」魚去御莊・模去暮精・歌去箇精 鐸部）

徂5-2 (模平從 魚部) : 叶入声

「徂5-2」に叶音注がついているだけだが、押韻相手字は「作3-2」であろう。ここに意図的な押韻があるかどうかはともかくとして、魚部と鐸部という陰入対転の関係を的確に捉えている。その関係に基づいて、模韻から鐸韻への変化を「叶入声」と表現したのなら、古音学の素養を踏まえて音の転換をとらえているということができるとはなからうか。郝敬の脳裏にあった音韻体系を反映すると見られる著作の1つに『讀書通』があるが⁽¹³⁾、そこでは、遇撮の精組は流撮に合流して「求」韻を形成しており、配されている入声韻は「屈」韻である。鐸韻は「末」韻に属するから、単純に「徂」と「作」とが対応する陰入の関係にあるとは言えない。やはり、古音に関する観察を基礎とした叶音注ではなからうかと思われる。291「良耜」では詩編中間の2句(第3句～第4句)と末句だけが無韻であるが、その第3・4句について、『毛詩原解』の音注は次のようである。

(穀3-4 東入屋見一 屋部)

活4-4 (①桓入末匣・2 桓入末見 月部) : 叶忽 (魂入沒曉)

これには朱熹『詩集伝』の先例がある。すなわち、『詩集伝』では「活4-4」に「叶呼酷反」という叶音注が付されており、朱熹はこれによって無韻部分を埋めている。「呼酷反」は中古音-k 韻尾、「忽」は中古音-t 韻尾であるが、『讀書通』では同じく「屈」韻に所属するから、郝敬においては両者は同価値であるかもしれない。

5. その他の例

上記3・4以外のもの、すなわち「周頌」以外の領域に属する詩編の中の入韻していない文字に押韻を認めている例で、2字連続した押韻を想定しているわけではないものが、若干例見られる。これらについては、朱熹の『詩集伝』の叶音に先例が見られるものがある。すなわち、

24「何彼襍矣」第1章

禮1-3 (鍾平娘・鍾平日 冬部) : 與離 (離3-4 鍾平影 東部) 叶
: 『詩集伝』に「禮1-3 (鍾平娘 冬部) : 如容反 與離叶」とある。

242「靈臺」第1章

臺1-4 (哈平定 之部) : 叶提 (支平開禪・齊平開定)
(之3-4) (之平章 之部)

：『詩集伝』に「臺1-4：叶田飴反」とある。

また、『毛詩原解』の音注には反映しておらず、「談経」・「読詩」において言及されているものではあるが、

40「北門」第1・2・3章

哉5-3 (哈平從 之部)：讀賈 (=齋 齊平開精)

(之6-3 之平章 之部)

(哉7-4)

：『詩集伝』に「哉5-3：叶將其反、下同」とある。

しかし、155「鴟鴞」第1章の音注は、

鴟1-2 (宵平云 宵部)：叶靈 (唐入鐸開疑)

子2-4 (之上止精 之部)：叶作 (唐入鐸開精・歌去箇精・[集] 魚去御莊)

室3-4 (真入質開書 質部)：叶芍 (陽入藥開禪・陽入藥開清・陽入藥開知・青入錫開端・蕭上篠匣)

斯4-4 (支平開心 支部)：叶梭 (戈平心)

である。この部分の「子2-4」・「室3-4」については『詩集伝』に「子2-4：又叶入声」、「室3-4：又叶上声」とあり、入声による押韻も可能だとしている。しかし、『詩集伝』の叶音は、『毛詩原解』のように、「鴟1-2」も含めた3字が宕攝開口入声の音で押韻していると思なす立場をとるものとするよりは、「子2-4」と「室3-4」の2つが上声音或いは入声音で互いに押韻していると思なすことが可能、という意味であると解釈するほうが妥当であろう。

さらにもう1つ指摘しておかなければならないのは、155-1の最後の叶音注「斯4-4：叶梭」はおそらく押韻を合わせるためのものではないということである。もちろん、続く第5句の句末字も「斯5-5」であって、ここは句末から第2字目の「勤4-3」と「閔5-4」とが文部の押韻を形成しているのであるが、それと同時に句末字に同じ字が来ることで、さらにその部分でも音が調和して押韻と同じ効果を上げていると思なすことが可能である。しかし、その場合、そもそも同一字の重複なのだから、「斯」の支韻の音でも音は調和するのであって、字音をわざわざ変える必要はない。この「斯」の叶音注に関しては、同じ著者の『読書通』の記述が参考になるであろう。

「斯 ……。又通作些。音梭。楚語也。宋玉招魂辭變兮作些。些即斯。詩恩斯勤斯、何人斯之類、並與些同。」(『読書通』卷之三)

つまり、この『詩経』155-1の第4句（「恩斯勤斯」）などに見られる「斯」は、『楚辞』の「兮」や「些」と同じ助詞を表記したもので、その場合、音は「梭」だというのである。郝敬の場合は、このような仮借・通用による音の変化もまた「叶音」と呼ばれている可能性があるので、留意せねばならない。下記の209「楚茨」第1章の「與5-4：叶餘」という音注などはどうであろうか。

與5-4（1魚上語以・②魚平以・魚去御以 魚部）：叶餘（魚平以）

この「與5-4」について、『詩集伝』には「與5-4：音餘」とある。

ここの「與5-4」は「與與」という疊音語で（盛んに茂っているさまを表す）、『詩集伝』の音注はその場合は平声の音であるということを指定したものと解釈できる。郝敬の場合はこのような破読も「叶」と称されているわけである。この平声の「與」はふつう不入韻字とされているが、郝敬において先立つ奇数句の「茨1-4（脂平開從 脂部）：慈（之平從）」や「為3-4（①支平合云・2支去寘合云 歌部）」とこの音で押韻可能（従って押韻している）とみなされているかどうか、3で言及した186「白駒」の第3章「駒1-4（虞平見 侯部）」と「思2-4（○之平心・之去志心之部）」の押韻を思い起こすと、可能性なしとは即断しがたいものがある。

6. どのような叶音注が付されているか

『詩経』の無韻部分に対し、『毛詩原解』が押韻の存在を認めて叶音注を付している詩編・詩章・詩句（および「談経」・「読詩」が押韻を認めている詩編・詩章・詩句）を観察すると、だいたい上の3つのタイプに分かれるようである。もともと押韻を認めるのが困難である詩編・詩章の文字に互いに押韻しうるような音を想定する場合、「叶音」としてどのような音の変化が許容されるのであろうか。また、その結果、どのような音のペア（ないしグループ）なら押韻することができるか。この点に関しては、後日『毛詩原解』全体の叶音注を観察してからまとめたいと考えているが、本稿で取り上げた無韻部分の例の範囲において、若干の気づきを下記に述べておきたい。

まず、上記4の①で紹介した271「昊天有成命」の叶音注をもう一度見てみよう。

命1-5（庚去映明三 真部）：叶芒（陽平微・唐平明）

（康2-9）（唐平開溪 陽部）

／

（密3-6 真入質明三 質部）

熙4-3（之平曉 之部）：叶吸（侵入緝曉三）

／

心5-3 (侵平心 侵部) : 叶相 (陽平開心・陽去漾開心)

靖6-3 (清上靜開從 耕部) : 叶將 (陽平開精・陽去漾開精)

押韻を合わせるということは、韻母部分の音の調和に関することであるから、基本的に声母の転換は(諧声や通仮、異文の例といった根拠をふまえている場合は別として)行われないと見て、韻母部分にだけ注目すると、この例では、例えば、「命」と音注字「芒」とは中古音では異韻であるが同じ-ŋ韻尾を持つので、主母音の音色が変化させられているものであろう。また、之韻の「熙」から入声緝韻の「吸」への転換は、陰声から入声への変化であるが主母音は近似ではないかと思われるし、-m韻尾の「心」字と-ŋ韻尾の「靖」字は鼻音韻尾という点は共通しており、しかも同じく鼻音韻尾を持つ陽韻の音への変化である。なお、『讀書通』では曾・梗・深・臻撰の舒声は合流して沈韻を形成しているから、「心」と「靖」は郝敬が基礎とする音系においては韻尾の相違も無かった可能性が高い(郝敬の本籍地である湖北京山の現代方言では4撰とも-n韻尾である)。このように、個々の例に注目するかぎりでは、漢語の音節をなす要素のいずれか(必ずしも1つには限らないが)が変化しており、字音の転換のありかたはある程度整然としている。しかし、それが1つの詩編・詩章の中で一堂に会すると、全体として、叶音における字音の転換のタイプはかなり広範囲にわたっていることが目立ってくる。さらに、下記の273「時邁」での「周3-5:叶章」や296「般」での「対6-4:叶旦」などは、いずれも陰声から陽声への転換にあたる例であるが、韻尾に先立つ主母音の部分がどの程度に変化しているのか、少なくとも無変化ではあるまいと考えられる。

273「時邁」

(邦1-4) (江平幫 東部)

周3-5 (尤平章 幽部) : 叶章 (陽平開章)

神6-4 (真平開船 真部) : 叶傷 (陽平開書・陽去漾開書)

(周9-4 やはり「叶章」か?)

296「般」

對6-4 (灰去隊端 物部) : 叶旦 (寒去翰端)

命7-4 (庚去映明三 真部) : 叶慢 (刪去諫明)

「周:叶章」や「対:叶旦」の例は、或いは、-uと-ŋ、-iと-nの韻尾のペアが相対応するものと考えられているためありえた叶音であるかもしれない。同じく4で言及した276「臣工」に見られる「牟9-4 (尤平明 幽部) : 叶芒 (陽平微・唐平明)」も上記「周:叶章」と同様に流撰と宕

撮が連関するタイプである。

また、個々の叶音のあり方には何らかの法則（或いは限界）が存在するのかもしれないが、場面場面でそれぞれの押韻相手字の音に調和させた結果、例えば、「命」については、本稿が観察の対象とした狭い範囲においてさえ、上記「叶芒」（271「昊天有成命」）、「叶慢（刪去諫明）」（296「般」）のほか、「叶蒙（東平明一）」（265「召旻」）もあって、都合3音が認められているとみなしてよからう。同様に「年」も「叶林（侵平来）」（276「臣工」）とされたり、「叶良（陽平開来）」（294「桓」）とされたりしており、同一の文字が、押韻によって複数の音に「叶」うことが容認されているようすが見られる。

上古音特有の現象に対する何らかの考察が本になっているのではないと思われる例も見られる。例えば、273「時邁」の「位10-4（脂去至合云 物部）：叶立（侵入緝来）」は、諧声符が叶音となった例である。また、276「臣工」の「求7-4（尤平群 幽部）：叶忌（之去志群）」における之韻と尤韻の連関は、上古音の之部の所属字のなかに中古音の之韻と尤韻の一部の文字が混じっていることを想起させるし、289「小毖」の「蜂3-4（○鍾平敷・東平並一 東部）：叶范（凡上范奉）」における東韻と凡韻の連関は、上古音の冬部と侵部の間にはしばしば見られる合韻現象（王の『詩經韻読』では1韻部「侵部」を形成すると判断されている）や「凡」～「風」の諧声系列などで、中古の通撰と侵・咸撰の文字が関連することを想起させる。これらの叶音注は、このような現象を踏まえて、之韻と尤韻、東韻と凡韻とは相通であるという判断がなされた結果現れているのではあるまいか。先に述べたように、270「天作」において「作3-2」の押韻相手字とされる「徂5-2：叶入声」の叶音注の例もある。

7. どのような字音が押韻できるとみなされているか

本稿で対象とした叶音注の範囲においても、たとえば『讀書通』の分韻をも逸脱した緩やかな音の調和が許容されているのではないかと考えられるような例が散見している。たとえば、

(1) 止撰開口・蟹撰開口細音と遇撰の通押

186「白駒」第3章 駒1-4・思2-4（前出。5参照）

209「楚茨」第1章 茨1-4・（為3-4?）・與5-4（叶餘）（前出。5参照）

276「臣工」 介5-4（叶計）・求7-4（叶忌）・奮8-4（叶御）（前出。4①参照）

止撰開口・蟹撰開口細音は『讀書通』では「遲」韻、遇撰は（一等端組・泥組と三等莊組を除き）「虞」韻である。しかし、『讀書通』で「危」韻に属する止撰合口については、遇撰と押韻させるために遇撰の叶音注をつけた例が見られる。

149「匪風」第3章 歸3-4 (①微平合見・2 [集] 脂去至合群三 微部)：叶居 (之平見・魚平見)：これは「魚1-4」(魚平疑 魚部)との押韻を認める故の叶音か。

ただし、下記の276「臣工」の最後の押韻例などは、「罇14-4：叶孛」が入韻しているとみなすならば、『讀書通』で「危」韻に属する蟹攝一等幫組と「遲」韻との押韻例となる。

276「臣工」(帝11-4)・人13-4 (叶義)・罇14-4 (博叶孛)・艾15-4 (刈) (前出。4 ②参照)

(2)曾・梗・深・臻攝開口細音の入声と曾・梗攝開口洪音および咸・山攝開口細音の入声との通押

186「白駒」第3章 白1-3と来2-3 (叶列) (前出。3 参照)

273「時邁」

嶽7-4 (江入覺疑 屋部)：叶葉 (塩入葉以・塩入葉書)

后8-4 (○侯上厚匣・侯去候匣 侯部)：叶赫 (庚入陌開曉二)

位10-4 (脂去至合云 物部)：叶立 (侵入緝来)

矢12-4 (之上止書 脂部)：叶設 (仙入薛開書)

『讀書通』では前者は「質」韻、後者は「徹」韻に属しており別韻である。ただし、273「時邁」の「位10-4：叶立」の例は諧声と関連する音注なので、その点特殊な扱いが必要であるかもしれない。

(3)宕攝入声と臻攝一等合口見系入声の通押

296「般」

嶽3-4 (江入覺疑 屋部)：叶噩 (唐入鐸開疑)

河4-4 (歌平匣 歌部)：叶霍 (唐入鐸合曉)

下5-4 (○麻上馬開匣二・麻去禡開匣二 魚部)：叶忽 (魂入沒曉)

宕攝入声は『讀書通』では「末」韻、臻攝一等合口見系の入声は通攝一等の見系と一緒に「屈」韻に入っている。しかし、同じく「屈」韻相当の通攝一等見系の「穀」が『讀書通』では「徹」韻に所属する山攝一等合口見系の「活」と押韻する場合には、「活」に叶音注がつけられている。

291「良耜」(穀3-4)・活4-4 (叶忽) (前出。4 ②参照)

なお、285「武」については、「後4-4（○侯上厚匣・侯去候匣 侯部）：叶虎（模上姥曉）」と「功7-4（東平見一 東部）：叶股（模上姥見）」、「受5-3（尤上有禪 幽部）」と「劉6-4（尤平来 幽部）：叶柳（尤上有来）」がそれぞれ別の押韻を成していると考えられているのか、第4句から第7句までの4字が一貫した押韻を成しているともみなされているのか判然としない。一貫した押韻であれば、遇撰一等見系の音と流撰の音の通押であって、前者は『讀書通』の虞韻、後者は同じく求韻に相当する。

8 おわりに

『毛詩原解』において、どのような音が互いに押韻可能であるとみなされ、そのための「叶」音はいかなる根拠があつて可能とされているのか、さらに『毛詩原解』の音注の全体を観察して考察を進める必要がある。その際、音の調和をはかる上で他の編よりも困難であることが予想される無韻部分において、他の詩編・詩章における場合との間に何らかの違いが見られるのかどうか、併せて注目したいと思っている。

なお、本稿は、平成17～19年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「郝敬の音韻研究について—『毛詩原解』の音注の分析を中心とした研究—」の研究成果の一部です。『毛詩原解』の各種テキスト、『讀書通』を収録する叢書『山草堂集』の閲覧に際しお世話になった大阪大学・名古屋大学・東京大学東洋文化研究所・尊経閣文庫に対し、深く感謝いたします。

注

(1) ほかに『周易正解』・『尚書辨解』・『毛詩原解』・『周礼完解』・『儀礼節解』・『礼記通解』・『春秋直解』・『孟子説解』・『論語詳解』の著作があり、総括して「郝氏九經解」あるいは「九部經解」と称される。

(2) 『明史』や『明儒学案』の伝による。

(3) 科学研究費補助金・基盤研究(C)「郝敬の音韻研究について—『毛詩原解』の音注の分析を中心とした研究—」平成17年度実績報告書

(4) 『詩経』の押韻字を指示した業績に限っても、顧炎武「詩本音」から江有誥「詩経韻読」に至る清朝時代の各書の他、近代のものでは陸志韋『詩韻譜』、江拳謙『詩経韻譜』、William H. Baxter “A Handbook of Old Chinese Phonology” の“Appendix B” ほかがある。

(5) 尊経閣文庫所蔵『山草堂集』所収「談経」の自序（「題辞」）の日付は明の「天啓甲子」（天啓4年。西暦1624年）である。

(6) 「談経」巻三「毛詩」ではその第五十四則にあたる。

(7) その全般特徴については、富平美波「『詩経』の音韻に関する、明・郝敬の解釈につい

て — 『談経』 卷三「毛詩」 第五十四則の記述から — (『慶谷壽信教授記念中国語学論集 2002.11 好文出版) を参照。

(8) 詩編名の前に付けた数字は、その詩編が『詩経』の第何番目の詩編であるかを示す通し番号である。以下、例えば、「汝墳」の第1章であれば、「11-1」のように表示することがある。

(9) 字の右側に細字で記したのは、その字が第何句目の第何字目に現れるかを示したものである。例えば、「條2-3」は当該「條」字は、当該詩章（ここでは10「汝墳」の第1章）の第2句目の3番目の字であることを示す。括弧内には先に中古音、『詩経』の字には次に上古音の韻部を注記した。音の表示法については、資料1の注(10-1)を参照のこと。

(10) 『詩集伝』(1974.4芸文印書館) 及び『詩集伝』(1961.1, 1987.4中華書局香港分局) によった。

(11) 卷末の資料2を参照。

(12) 289「小毖」については文字の所属句の句数は『毛詩原解』の句分けに従って記す。卷末の資料2の注を参照のこと。

(13) 忌浮「明末湖北京山方言音系—読郝敬《読書通》」(『語言研究』25巻4期 2005.12)・富平美波「郝敬「五声譜」研究序説」(『アジアの歴史と文化』第10輯 2006.3) を参照。

資料1 (「両字連叶」の例)

10汝墳 第1章 (注)

條2-3 蕭平定 徒聊切 tiáo 幽

調4-3 1 蕭平定 徒聊切 tiáo

②尤平知 張流切 zhōu 幽

蕭去嘯定 徒弔切

枚2-4 灰平合明 莫杯切 méi 微

飢4-4 脂平開見三 居夷切 jī 脂

43新臺 第3章

離2-3: 歷

離 支平開來 呂支切 lí 歌

支去寘開來 力智切

齊去霽開來 郎計切

歷 青入錫開來 郎擊切

戚4-3 青入錫開清 倉歷切 qī 覺

之2-4 之平章 止而切 zhī 之

施4-4 ①支平開書 式支切 shī 歌

2集「以鼓切」支去寘開以

186白駒 第3章

白1-3 庚入陌並二 傍陌切 bái 鐸

來2-3: 力 (談經・讀詩)

來 ①哈平來 落哀切 lái 之

2集「洛代切」哈去代來 lài

力 蒸入職開來 林直切

來2-3: 與白叶列 (原解)

列 仙入薛開來 良辭切

駒1-4 虞平見 舉朱切 jū 侯

思2-4 之平心 息茲切 sī 之

之去志心 相吏切

資料2 (「周頌」の例)

270天作

(作3-2 ①唐入鐸開精 則落切 zuò 鐸

2集「莊助切」魚去御莊 zǔ

模去暮精 臧祚切

歌去箇精 則箇切)

徂5-2: 叶入声

徂 模平從 昨胡切 cú 魚

271昊天有成命 (注)

命1-5: 叶芒 (注)

命 庚去映明三 眉病切 mìng 真

芒 陽平微 武方切

唐平明 莫郎切

(康2-9 唐平開溪 苦岡切 kāng 陽)

(密3-6 真入質明三 美筆切 mì 質)

熙4-3: 叶吸

熙 之平曉 許其切 xī 之

吸 侵入緝曉三 許及切

心5-3: 叶相 (注)

心 侵平心 息林切 xīn 侵

相 陽平開心 息良切

陽去漾開心 息亮切

靖6-3: 叶將

靖 清上靜開從 疾郢切 jìng 耕

將 陽平開精 即良切

陽去漾開精 于 [子] 亮切 (注)

273時邁

(邦1-4 江平幫 博江切 bāng 東)

周3-5: 叶章

周 尤平章 職流切 zhōu 幽

章 陽平開章 諸良切

神6-4: 叶傷

神 真平開船 食鄰切 shén 真

傷 陽平開書 式羊切

陽去漾開書 式亮切

(周9-4)

(子2-4 之上止精 即里切 zǐ 之)

震4-3: 叶止

震 真去震開章 章刃切 zhèn 文

止 之上止章 諸市切

嶽7-4: 叶葉

嶽 江入覺疑 五角切 yuè 屋
葉 塩入葉以 與涉切
塩入葉書 書涉切

后8-4：叶赫

后 侯上厚匣 胡口切 hòu 侯
侯去候匣 胡邁切

赫 庚入陌開曉二 呼格切

位10-4：叶立

位 脂去至合云 于愧切 wèi 物

立 侵入緝來 力入切

矢12-4：叶設

矢 之上止書 式視切 shǐ 脂

設 仙入薛開書 識列切

／

夏14-4：叶火

夏 1 麻去禡開匣二 胡駕切 xià

②麻上馬開匣二 胡雅切 xià 魚

火 戈上果曉 呼果切

保15-3：叶跛

保 豪上皓幫 博抱切 bǎo 幽

跛 戈上果幫 布火切

支去寘幫三 彼義切

275思文

牟5-4：叶謀

牟 尤平明 莫浮切 móu 幽

謀 尤平明 莫浮切

育6-4：叶由

育 東入屋以 余六切 yù 覺

由 尤平以 以周切

／

界7-5：叶稼

界 皆去怪開見 古拜切 jiè 月

稼 麻去禡開見二 古訝切

(夏8-5 1 麻去禡開匣二 胡駕切 xià

②麻上馬開匣二 胡雅切 xià 魚)

276臣工

公2-4：叶孤 (注)

公 東平見一 古紅切 gōng 東

孤 模平見 古胡切

茹4-4：孺 叶如

茹 魚平日 人諸切 rú 魚

魚上語日 人渚切

魚去御日 人恕切

孺 虞去遇日 而遇切

如 魚平日 人諸切

魚去御日 人恕切

／

介5-4：叶計

介 皆去怪開見 古拜切 jiè 月

計 齊去霽開見 古詣切

求7-4：叶忌

求 尤平群 巨鳩切 qiú 幽

忌 之去志群 渠記切

畚8-4：叶御

畚 魚平以 以諸切 yú 魚

麻平開昌 尺遮切

御 魚去御疑 牛倨切

／

牟9-4：叶芒

牟 尤平明 莫浮切 móu 幽

芒 陽平微 武方切

唐平明 莫郎切

(明10-4 庚平明三 武兵切 míng 陽)

年12-4：叶林

年 先平開泥 奴顛切 nián 真

林 侵平來 力尋切

／

(帝11-4 齊去霽開端 都計切 dì 錫)

人13-4：叶義

人 真平開日 如鄰切 rén 真

義 支去寘開疑三 宜寄切

鏞14-4：博 叶孛

鏞 唐入鐸幫 補各切 bó 鐸

博 唐入鐸幫 補各切

孛 灰去隊並 蒲昧切

魂入沒並 蒲沒切

艾15-4：刈

艾 1 去泰開疑 五蓋切 ài

②去廢開疑 魚肺切 yì 月 (注)

刈 去廢開疑 魚肺切

277噫嘻

爾2-4：叶五

爾 支上紙開日 兒氏切 ěr 脂

五 模上姥疑 疑古切

穀4-4：叶古（注）

穀 東入屋見一 古祿切 gǔ 屋

古 模上姥見 公戶切

里6-4：叶呂

里 之上止來 良士切 lǐ 之

呂 魚上語來 力舉切

耦8-4：叶羽

耦 侯上厚疑 五口切 ǒu 侯

羽 虞上麌云 王矩切

虞去遇云 王遇切

285武

(王1-4 ①陽平合云 雨方切 wáng 陽

2 陽去漾合云 于放切 wàng)

烈2-4：叶良

烈 仙入薛開來 良辭切 liè 月

良 陽平開來 呂張切

(王3-4 ①陽平合云 雨方切 wáng 陽

2 陽去漾合云 于放切 wàng)

／

後4-4：叶虎

後 侯上厚匣 胡口切 hòu 侯

侯去候匣 胡邁切 hòu

虎 模上姥曉 呼古切

(受5-3 尤上有禪 殖酉切 shòu 幽)

劉6-4：叶柳

劉 尤平來 力求切 liú 幽

柳 尤上有來 力久切

功7-4：叶股

功 東平見一 古紅切 gōng 東

股 模上姥見 公戶切

289小毖（注）

懲1-3：叶綻

懲 蒸平開澄 直陵切 chéng 蒸

綻 山去禰開澄 丈莧切

(患2-4 刪去諫合匣 胡慣切 huàn 元)

蜂3-4：叶范（注）

蜂 東平並一 薄紅切

鍾平敷 敷容切 fēng 東

范 凡上范奉 防鏗切

螿4-4：釋叶善

螿 清入昔開書 施隻切 shì 鐸

釋 清入昔開書 施隻切

善 仙上彌開禪 常演切

蟲5-5：叶懺

蟲 東平澄 直弓切 chóng 冬

東去送澄 直衆切

懺 銜去鑑初 楚鑿切

難7-5：叶去聲

難 1 寒平泥 那干切 nán

②寒去翰泥 奴案切 nàn 元

3 『釈文』「乃多切」歌平泥 nuó

歌

290載芟

且29-2：與茲叶賚

且 ①麻上馬開清 七也切 qiè 魚

2 魚平精 子魚切 jū (注)

賚 (齎) 齊平開精 相 [祖] 稽切

(且29-4)

(茲31-4 之平精 子之切 zī 之

之平從 疾之切)

291良耜

(穀3-4 東入屋見一 古祿切 gǔ 屋)

活4-4：叶忽

活 ①桓入末匣 戶括切 huó 月

2 桓入末見 古活切 guō

忽 魂入沒曉 呼骨切

293酌（注）

師1-4：叶賽

師 脂平開生 疏夷切 shī 脂

賽 哈去代心 先代切

(晦2-4 灰去隊曉 荒內切 huì 之)

(介4-4 皆去怪開見 古拜切 jiè 月)

造6-5：叶菜

造 豪上皓從 昨早切 zào 幽

豪去号清 七到切 zào (旧 cào)

幽

菜 哈去代清 倉代切

師9-2: 叶賽

師 脂平開生 疏夷切 shī 脂

賽 哈去代心 先代切

294桓

(邦1-3 江平幫 博江切 bāng 東)

年2-3: 叶良

年 先平開泥 奴顛切 nián 真

良 陽平開來 呂張切

(王4-4 ①陽平合云 兩方切 wáng 陽

2 陽去漾合云 于放切 wàng)

(方6-4 陽平非 府良切 fāng 陽

陽平奉 符方切)

/

解3-4: 懈

解 佳去卦開見 古隘切 xiè 錫

佳上蟹開匣 胡買切

佳上蟹開見 佳買切

佳去卦開匣 胡懈切

懈 佳去卦開見 古隘切 (xiè)

士5-4: 叶賽

士 之上止崇 鉏里切 shì 之

賽 哈去代心 先代切

家7-4: 叶介

家 麻平開見二 古牙切 jiā 魚

介 皆去怪開見 古拜切

/

(天8-4 先平開透 他前切 tiān 真)

閒9-3: 叶肩 (注)

閒 1 山平開見 古閑切 jiān

②山去禰開見 古覓切 jiàn 元

肩 先平開見 古賢切

296般

周1-4: 叶占

周 尤平章 職流切 zhōu 幽

占 塩平章 職廉切

塩去豔章 章豔切

山2-4: 叶千

山 山平開生 所閒切 shān 元

千 先平開清 蒼先切

/

嶽3-4: 叶噩

嶽 江入覺疑 五角切 yuè 屋

噩 唐入鐸開疑 五各切

河4-4: 叶霍

河 歌平匣 胡歌切 hé 歌

霍 唐入鐸合曉 虛郭切

下5-4: 叶忽

下 麻上馬開匣二 胡雅切 xià 魚

麻去禡開匣二 胡駕切

忽 魂入沒曉 呼骨切

/

對6-4: 叶旦

對 灰去隊端 都隊切 duì 物

旦 寒去翰端 得按切

命7-4: 叶慢

命 庚去映明三 眉病切 mìng 真

慢 刪去諫明 謨晏切

資料3 (その他)

24何彼穠矣 第1章

穠1-3: 與離叶

穠 鍾平娘 女容切

鍾平日 而容切

(穠 鍾平娘 女容切 nóng 冬) (注)

離3-4 鍾平影 於容切 yōng 東

(40北門 第1·2·3章) (注)

哉5-3: 讀賈

哉 哈平從 祖才切 zāi 之

賈 (齋) 齊平開精 相 [祖] 稽切

(之6-3 之平章 止而切 zhī 之)

(哉7-4 哈平從 祖才切 zāi 之)

149匪風 第3章

(魚1-4 魚平疑 語居切 yú 魚)

歸3-4: 叶居

歸 ①微平合見 舉章切 guī 微

- 2集「求位切」脂去至合群三 kui
 居 之平見 居之切
 魚平見 九魚切
- 155鴟鵂 第1章 (注)
 鴟1-2：叶醜
 鴟 宵平云 于嬌切 xiāo 宵
 醜 唐入鐸開疑 五各切
 子2-4：叶作
 子 之上止精 即里切 zǐ 之
 作 唐入鐸開精 則落切
 歌去箇精 則箇切
 集「莊助切」魚去御莊
 室3-4：叶苟
 室 真入質開書 式質切 shì 質
 苟 陽入藥開禪 市若切
 陽入藥開清 七雀切
 陽入藥開知 張略切
 青入錫開端 都歷切
 蕭上篠匣 胡了切
 斯4-4：叶梭
 斯 支平開心 息移切 sī 支
 梭 戈平心 蘇禾切
- 209楚茨 第1章
 茨1-4：慈
 茨 脂平開從 疾資切 cí 脂
 慈 之平從 疾之切
 (爲3-4 ①支平合云 遠支切 wéi 歌
- 2支去寘合云 于僞切 wèi)
 與5-4：叶餘
 與 1魚上語以 余呂切 yǔ
 ②魚平以 以諸切 yú 魚
 魚去御以 羊洳切
 餘 魚平以 以諸切
- 242靈臺 第1章 (注)
 臺1-4：叶提
 臺 哈平定 徒哀切 tái 之
 提 支平開禪 是支切
 齊平開定 杜奚切
 (之3-4 之平章 止而切 zhǐ 之)
- 259崧高 第7章
 謝2-4：叶洗
 謝 麻去禡開邪 辭夜切 xiè 鐸
 洗 齊上齊開心 先禮切
 先上銑開心 蘇典切
 (喜4-4 之上止曉 虛里切 xǐ 之)
 舅7-4：叶已 (己か?)
 舅 尤上有群 其九切 jiù 幽
 己 之上止見 居理切
- 265召旻 第7章
 命1-5：叶蒙
 命 庚去映明三 眉病切 mìng 真
 蒙 東平明一 莫紅切
 (公2-4 東平見一 古紅切 gōng 東)

資料注

資料1

10-1 中古音は『広韻』に収録されているものは全て示した。ほかに、『《詩經》古今音手冊』(以下「手冊」と略記。向熹著 1988.2南開大学出版社。)を参照して、同書が収録する音に『広韻』以外の典拠に基づくもの(例えば『集韻』の音など。「集」と略示し、先に反切を掲げる。)があれば補い、「手冊」が字義によって字音が異なるとしているものは、同書に従って音に番号を付し、該当する音の数字に○を付けた(例えば、第1の音が該当し、第2の音は該当しないなら、①・2のように記す)。その際、向熹編『詩經詞典』(以下、「詞典」と略記。1986.3, 修訂本

1997.7四川人民出版社）・董治安編『詩經詞典』（1989.4山東教育出版社）も参照した。現代音（ピンイン表記）と上古音の所属韻部については「手冊」に従ったが、韻部名は王力『詩經韻讀』（以下「韻讀」と略記。）のそれに合わせた。ピンインによる現代音が右側に付されている音が、「手冊」によって採用されている中古音であって、本稿の本文中では音表示の頭に◎を付して示している。資料2・資料3についても同じ。

例：庚入陌開曉二 呼格切＝（庚韻と相配の）入声陌韻開（口）曉母二等の音。『広韻』の反切は「呼格切」。

資料2

271 『毛詩原解』（以下「原解」とする。）では、271「昊天有成命」の句の分け方が「韻讀」のそれと異なる。「原解」では、全6句で、「二后受之成王不敢康」の9字が第2句とされているもようである。

271 「命3-4」について、（存）・（名）では、版面上で、その下の割注の2字分が黒くつぶしてあるようすが見られる。（東）ではその部分が空白になっている。

271 「心5-3」に対する音注「叶相」は、（名）は版本が欠損しており不明。

271 沢存堂本『広韻』の反切「于亮切」の「于」を周祖謨が「子」に校訂しているもの。以下、同様に記す。

276 「韻讀」では「公2-4」は「工1-4」と東部の押韻を形成しているとみなされている。

276 「手冊」ではこの②に該当する音として『正韻』の反切「倪制切」（祭韻）を掲げている。

277 （存）・（名）・（東）ともに「穀4-4」を「穀」に作る。略字を使用したものか。

289 「韻讀」では289「小毖」の句の分け方が「原解」と異なっている。「韻讀」では「予其懲而毖後患」の9字を第1句としているが、「原解」では「予其懲」（第1句）・「而毖後患」（第2句）と2句に分けている。

289 「原解」は「蜂3-4」の旁を「夆」に作っている。

290 「詞典」はこのほかに第3の音として『集韻』の「叢租切」（模平從 cú）を掲げている。

293 「韻讀」では293「酌」の句の分け方が「原解」と異なる。「韻讀」では「実維爾公充師」の6字が第8句を成し、従って全8句。「原解」では「実維爾公」が第8句、「充師」の2字が第9句で、従って全9句である。

294 この音注字を「原解」は「尸」の下に「月」に作っている。ここでは「肩」字とみなして解釈した。

資料3

24-1 「原解」は「禮」を「禮」に作っている。「手冊」は「禮」のみを掲載している。「手冊」

の冬部は「韻読」にならば侵部とされるところ。

40-1.2.3 「談経」「読詩」に「至于文字聲音、假借尤多、除一字四聲相通者不論、其餘以旁音借讀、如……、哉讀賣、已焉哉、天實爲之之類」とある。これは、「哉5-3」と「之6-4」（と「哉7-3」）は押韻しているとみなしたものか。「韻読」では「為6-3」と「何7-3」が押韻字で、歌部。

155-1 「談経」「読詩」に「古詩叶韻、但彷彿、不必切合。如……、鴟鴞首章、前三句入聲、後二句平聲之類。」とある。これに従えば、「鴟1・子2・室3」（入声）と「勤4・閔5」（平声）がそれぞれ押韻か。「原解」の「斯4-4：叶梭」という音注が押韻とどう関わっているかは不明。「談経」「読詩」にはまた、「至于文字聲音、假借尤多、除一字四聲相通者不論、其餘以旁音借讀、如……、斯讀蓑（「読詩」は「蓑」に作る）、恩斯勤斯、鬻子之閔斯之類」ともある。

242-1 音注がついているのは「臺1-4」のみ。「之3-4」と押韻か。なお、これに後続する段の第5句・第6句は職之通韻の押韻であるが、「原解」ではそちらの韻字には入声の音注を付しており、一連の押韻とはみなされていないと思われる。